

評 価 研 究 部 会

I 研究テーマ

「生きる力を培う評価」

II 研究テーマ設定の理由

知識の習得だけの学習ではなく生きていくために必要な力をつけていくために、一人ひとりが持っている自分のよさや可能性を十分発揮させ、心豊かに主体的創造的に生きる力を身につけていくようにするためにどうしたらよいだろうか、ということを念頭に置き研究を進めてきた。生きる力を培うには、①自分自身が「大切な存在である」「役に立つ」という気持ち子どもたちにもたせること、②「どうしていったらよいかを考える」「協力し合う」「見通しを持つ」力を身につけさせること、が大切であると考えた。このような子ども達を育てていくためには評価活動をどうしていったらよいか研究を進めるために、今年度もこのテーマを設定した。

III 研究の経過と内容

1. 研究の経過

4月11日	研究テーマ・メンバーの確認	9月 3日	実践報告と討議
5月14日	研究の計画の決定	10月 1日	実践報告と討議
6月18日	実践報告と討議	10月26・27日	教育研究山梨県集会
7月31日	実践報告と討議	11月 5日	県集会環流報告
8月16日	実践報告と討議	1月21日	研究のまとめ

2. 研究の内容

(1) 子どもが主体となる学びの追求

日々の教育活動において、ともすると受動的になりがちな子どもの学びを「主体的な学び」にしていくための研究をする。(目的意識を持たせるなど)

(2) 振り返り活動を取り入れた実践

子ども自身が自分の活動を振り返り、自分自身の学びぶり(何がわかったか、何がまだ足りないのかなど)を考え、メタ認知を高めていく。そこから先へ見通しを持って学習に取り組み、次へとつなげていく。この学習サイクルを大切にしていくことで、主体的に学ぶ子ども達を育てていく。

子どもにも教師にも学習を振り返りやすく、見やすく、また短時間で効果的に行えるように、学びの全課程を一枚の用紙の中で振り返ることができる1枚ポートフォリオの形式も取り入れる。

(3) 誰もが普段の授業の中で取り組むことができる授業

特別なものではなく、普段から授業でつかえるという視点で実践を報告し合い、前年度の実践を取り入れた検証を重ねることもめざす。

(4) コーチングを取り入れた授業

子どもの自己肯定感を高め、夢に向かって行動する子どもたちを育てる。実践としては、ドリームマップ作りを子ども達に体験させる。

3. 実践例 1年 図工 「夏休みの思い出」

(1) はじめに

1年生は、絵を描いたり工作をしたりするのが大好きで、1学期から図工の時間を楽しみにしている子が多い。図工は、絵を描いたり工作をしたりする中で自分の思いや気持ちを自由に表現することができる楽しい教科であると思う。

1学期の図工では、作品が完成した後で、友だちの作品をみんなで見合う時間をとってきた。しかし担任が作品を見せ、子ども達は拍手をするというやり方で、自分の作品をふり返ったり友だちの作品を評価したりするまではできていなかった。友だち同士お互いに作品を紹介し合ったり鑑賞し合ったりすることにより、子ども達が満足感を感じたり自信や次への意欲につながったりするだろうと思う。

1学期にはひらがなの学習も終わり、感想も書けるようになってきた。そこで、2学期の始めに、自分の作品をふり返り、友だち同士で鑑賞し合う時間を取り、自己評価や相互評価に重点を置いた図工の学習に取り組んでみた。

(2) 授業の流れ

〔導入〕・夏休みをふり返り、自分自身が見たり感じたりして心に残っている出来事や様子を思い浮かべる。

〔展開〕・その時の様子が伝わるように、人や物の大きさや位置を考え、工夫して絵に表す。

〔ふり返り〕・夏休みの思い出を話しながら、仕上がった作品をみんなに見せる。

・友だちの作品のよい所を見つけ、カードに書いて友だちに渡す。

・自分の作品に対する友だちの感想を読み、思いが伝わったかをふり返る。

(3) 成果と課題

子ども達は、楽しかった夏休みをふり返り、絵に表そうとする心に残った出来事を決め、その時の様子をくわしく思い出そうとしていた。また、作品に取り組む中でもかきたいことを友だちに伝えようと考え、人や物の大きさや位置等を工夫している姿が見られた。

作品が仕上がったところで、「自分の心に残ったことを絵の中に上手に表すことができたか。」についてまず自分でふり返りをし、次に班毎で絵を見せ合いながら友だちに話

しをした。その後、友だちの作品の良いところを見つけてカードに書いていくようにした。どの子ども楽しそうに友だちの作品を観て書いていた。最後に、自分の作品に対する友だちからの感想を読んで思ったことを書いた。

どの子ども自分の絵について友だちに褒めてもらいとても嬉しそうだった。しかし、友だちの作品に対するコメントは、「花火がきれいだね。」「東京タワーが大きくて上手だね。」等、1年生の段階では語彙も少ないので同じようなものになってしまった。また、まだ書くことに抵抗がある子や時間がかかる子もいて、じっくり鑑賞し合う時間が取れない班もあった。

自分の作品をふり返ったり友だち同士で鑑賞し合ったりすることは初めての経験だったが、友だちから良いところを褒めてもらったことはとても嬉しかったようだ。「いいことをいっぱい書いてもらって嬉しかった。」「みんなありがとう。海の水をきれいに描いてよかったです。」等の感想もあり、満足感や自信を持つことができたと思う。

IV 研究の反省と課題

子ども自身が活動を見通し、振り返り、自分自身の成長が実感できる学習活動の実践を重ねてきた。このような評価活動をここ数年継続して行うことにより、子ども自身に自らを振り返らせ、自分の成長を実感させることが大変有効であったと手応えを感じている。それは、高学年だけの成果ではなく、1年生や2年生といった低学年の子どもたちにも言うことができる。難しいことを書かせるのではなく、1時間の中でどんなことがわかったのか、どんなことが得られたのか、その学びの中でこれから何をしていきたいのかなど、自分の学びを実感することのできる記録を続けていく事が大事である。時には顔マークなどの絵で表したり、シールをはってみたりと、子どもたちの興味がわくような手だても必要になってくる。

また、振り返りをするということは、次への目標を持つと言うことで、そのつながりをしっかりと意識させていくということが重要となってくる。そのためには、教師がねらいと見通しをしっかりと持ち授業を行う、ということが大切である。子どもが試行錯誤したり話し合ったりお互いの良さを見つけたりすることのできる教材選び・授業展開の工夫・臨機応変に対応できる技量なども必要になってくる。その際にも、ただ振り返らせて反省する作業をするのではなく、自分のできたところ、上手くいかなかったところを具体的に想起できるように支援していくことも教師の大事な役割であるといえる。そうすることで次にどうしたら良いかを実践につなげることができる。

子ども自身が「自分はたいせつな存在である。」と感ずることも子どもたちを育てていく上では重要である。他の人から認められることで自分への肯定感につながり、よりよく生きていくことにつながると考える。人間は、「人の役に立っている。」と感ずることが生き甲斐になるとよく言われる。子どもたちも認められて、自分が役に立っていることを感ずることでステップアップしていこう。自分や他人への信頼感を育てていくためにも、自分を振り返る、友だちの良いところを見つけ伝え合う、という取り組みを今後も続けていきたい。

